『ジェイコブの部屋』をあとにしたジェイコブ
── エディプス・コンプレックスへの模索 ──

Jacob Leaving *Jacob's Room*
── Struggling toward the Oedipus Complex ──

丹羽　敦子

The protagonist of Virginia Woolf's *Jacob's Room*（1922）, Jacob, has been usually read to be killed in World War I. However, there is no evidence in the novel to show his death on a battlefield. This article explores this mysterious death of his in terms of his relationship with his mother.

Jacob's lack of language associated with a preverbal infancy demonstrates that Jacob remains in the pre-oedipal phase. He goes in quest of a suited mother to construct mother-son's relationship and repeatedly demands Mother's love from several women including his own mother. But all his attempts eventually fail. He cannot pass the Imaginary to stay there in pursuit of Mother's love, which makes ambiguous his death in the war, since war is usually regarded as a masculine event in the Symbolic. In this sense Jacob might be read to survive the Great War in some way because he refuses to accede to the Symbolic. The possibility of his survival can be interpreted as subversive of the Symbolic order.

Key words :　Virginia Woolf　the pre-oedipal phase　World War I

本論では、ヴァージニア・ウルフの小説『ジェイコブの部屋』(1922) を、主人公ジェイコブとその母ベティの関係を軸に再読し、第一次世界大戦で戦死したとされるジェイコブの死の真相の見直しを試みる。

その寡黙さが言語未習得の幼児を連想させるため、前エディプス期にいると推測できるジェイコブは、母とだけでなく、他の女たちとも母子関係を結ぼうと試み、「母」の愛の獲得に努めるが、それらはことごとく失敗する。そのため彼は想像界に留まり、「母」の愛を求め続けざるをえないのだが、このことが、ジェイコブが戦死したとする解釈に疑問を投げかける。想像界で逡巡するジェイコブが、象徴的な領域である戦争に参加したとは考えにくく、また想像界にいるからこそ、戦争を生き抜いたとも言えるからである。そしてこの可能性は、彼が戦死したとする定説を覆すとともに、象徴界の秩序の揺らぎをも露呈する。

キーワード：　ヴァージニア・ウルフ　前エディプス期　第一次世界大戦

ヴァージニア・ウルフの小説『ジェイコブの部屋』は、第一次世界大戦後の1922年に書かれ、主人公ジェイコブ・フランダースの幼年時から26歳で戦死するまでの20数年間を描いたものである。開戦前後を舞台にしているため戦争を思わせる描写も多く、なによりも主人公が戦争で死ぬために、第一次世界大戦で死亡した人々へのエレジーだと言われている。[1]また主人公同様、26歳という若さで亡くなったウルフの兄トビーの死を悼んだものだという伝記的指摘も多い。

だが、そもそも主人公ジェイコブは本当に死んだのだろうか。なぜなら、ジェイコブが戦死したことは明らかだとされているものの、「ジェイコブが死んだ」という明確な記述はどこにも見あたらないからである。この疑問に答えることが本論の最大のテーマである。残されたジェイコブの部屋は、まるで近くへ出かけてすぐにでも戻ってくるかのように雑然としている。もし留守にしているだけなら、いったいどこへ、そしてなぜ出かけなければならなかったのだろうか。こうした疑問が続いて生じてくる。

一方、小説の冒頭で、「もちろん……去るしかありませんでした（So of course, ... there was nothing for it but to leave)」（3）というジェイコブの母ベティが書く手紙の一節が、突然突きつけられるため、いったい誰が、どこから、どこへ、なぜ去るのか、という疑問で、出だしから混乱させられる。その答を得られないまま、物語は最後、ジェイコブのいない部屋にベティが現れて終わる。ここにきてようやく、「去った」のはジェイコブだったのではないかと思い至るのである。その意味でこの小説は最初から最後まで、ジェイコブがどこから何のためにいなくなったのかを探る道程であったことがわかる。しかも、小説の冒頭でも最後でも、母の前には現れないジェイコブは、彼が母から去っていったことを仄めかす。

ところでジェイコブの顕著な特徴は、何度か指摘されるように無口なことであり、特に女とは滅多に言葉を交わさないことである。のちに触れるように、この特徴が言語の欠如を示唆し、したがって前エディプス期の言語未習得の幼児の状態を連想させるならば、ジェイコブがエディプス・コンプレックスを経験する前の段階にいると想定でき、必然的に母との関係が重要なものとなってくる。しかし最初と最後の場面だけでなく、作品中では、ジェイコブと母ベティとの直接的な接触は、幼児期の一部を除いて皆無である。そこで本論では、エディプス期直前に留まっていると思われるジェイコブ母子の関係を通して、ジェイコブが母から去っていった理由を探る。その際、この母子関係をより鮮明にするために、ジェイコブと母以外の女たちとの関係をまずは追ってみたい。その結果、ジェイコブが戦争で死んだとされる「定説」を再考することになるはずである。

1．母を求めて　ー　サンドラの場合

エリートで容姿にも優れているジェイコブは、当然のように多くの女に次々と関心を持たれる。だが概してジェイコブから女たちに関心を向けることは稀であり、その唯一の例外がサンドラであった。サンドラは、ジェイコブがギリシアを訪れた際に知り合ったイギリス女で、彼女とともに旅行中の夫エヴァン・ウェントワースが嫉妬することからもわかるように、サンドラもまたジェイコブに非常な関心をもつ。しかしほかの女たちの場合と全く違うのは、サンドラにはジェイコブの姿が見え、[2]ほかの女たちには向けられないジェイコブの視線がサンドラには注がれることであり、また女の前ではほとんど沈黙していたジェイコブが、サンドラとの間には会話が成立する点である。では、二人の間で交わされる視線と会話には、どのような意味があるのだろうか。

男の沈黙と、女の視線に出会った男の混乱に関しては、スティーヴ・ニールが映画『サムライ』を例にとり言及している。映画では、寡黙で孤独な殺し屋のヒーローが、黒人の女性歌手と出会い視線を交わすことを契機に、傷つき投獄され、最後には彼女に会いに行く途中で撃ち殺される。このヒーローの沈黙すなわち言語の欠如と、女という他者との出会いについてニールは、ヒーローの寡黙さは、言語を取得することで可能となる社会化を避けているゆえのものであり、そのナルシシズム的な全能性は、女という他者を目の前にして社会化される（この場合は社会的に断罪される）ことが予想されると指摘している（280）。このことは、ジェイコブとサンドラの出会いを示唆するものである。

サンドラとジェイコブの間では、サンドラがつねにジェイコブに対して支配的な位置に立ち、彼女の一方的な指図に対して、ジェイコブは彼女の要求をすべて受け入れ、終始受け身である。サンドラは彼に対してチェホフを読むように薦め、コンスタンチノープルへ同行するように誘い、デルフォイに行くよう指示するが、ジェイコブはこれらの要求に全て従う。またサンドラの孤独な子ども時代の話を聞いて、自分がそこにいたら、その「危機」から救い出してやれたのにとも思う。こうした彼女からの要求の受け入れや、彼女を助けたいという感情は、エディプス期直前の子どもが、「母」が欲するものを問いただし、「母」の現前を望む、前エディプス期を連想させる。エディプス期への準備段階ともいえるこの時期には、子どもは「母」の現前を求めて「母」に欲求をつきつけ「母」を呼ぶが、その欲求が満たされれば「母」が消えてしまうことを知ると、「母」が望んでいるものを与えて「母」を繋ぎとめようとする。つまり、ナルシシズム的な幼児の全能性が、「母」という他者の側へ移行していくことを意味する。このことから、ジェイコブとサンドラの間で交わされる会話は、「母」の現前を求めて幼児が声をあげる「呼びかけ」だと考えられ、この意味において、ジェイコブとサンドラの関係を「子」と「母」の関係に重ねることができる。ジェイコブがサンドラに出会う直前の語り手の言葉、「彼（ジェイコブ）は一人の男になり、まさにものごとに巻き込まれようとしていた」（122）は、エディプス期という象徴界を目前に控えたジェイコブの状態を表したものだろう。

さらに、子どもは「母」の要求するものを与えようと繰り返すなかで、「母」が欲しているものが想像的な「ファルス」であることを知り、自らがその対象になることを望むようになる。そしてこの「ファルス」が、象徴界すなわち言語が支配する領域に入ることによって「父」に置き換わり、母子の間に「父」が介入することになる。だがこうした「父」の介入が、サンドラとジェイコブの間には見あたらない。ここで思い出されるのが、サンドラの夫エヴァンの存在である。しかし彼は、「非常に野心に充ちてはいたが非常にものぐさな性質であったために、何ごとも達成しなかった」（125）男であり、自分の能力に常に苛立っている人間であるため、象徴界に君臨できる「父」とは言い難い。サンドラは、「わたしは、彼（ジェイコブ）の何を欲しいのだろう。きっとそれは、わたしが手にいれそこなった何かなのだわ……」（139）と自問するが、この独白は、彼女がジェイコブにデルフォイへ行くよう指示するのと同時に発せられるため、この「何か」は、「母」が欲望するものを指していると考えられる。したがって、ジェイコブが「何か」であることを、サンドラが期待していることを窺わせる。言い換えれば、夫エヴァンは「何か」ではないことを、つまりサンドラにとっての象徴界の「ファルス」ではないことが明らかにされている。エヴァンが、ジェイコブとサンドラが話をする際にはしばしば席をはずし二人の前から消えることも、彼が「子」と「母」の間に介入してくるはずの「父」にはなりえていないことを示している。

では、サンドラが欲望する「ファルス」とは、何であったのか。それは息子だと思われる。女は「ペニス羨望」により、息子を持つことを望むといわれている。フロイトは、「男の子との関係のみが、母親に無制限の満足をもたらすのであり、それは一般にあらゆる人間関係のうち最も完全な、最もアンビヴァレンツから離脱した関係」（フロイト，a495）だと述べているが、女は息子の母となって初めて欲望を満足させられることができると考えられている。イギリスへ帰ったサンドラの傍らには彼女の息子だと暗示される男の子がいるのだが、「ペニス羨望」に倣えば、息子を持つことでサンドラは、「わたしが手にいれそこなった何か」を手に入れることができたと推測できる。[3]こうして、ジェイコブが占めると期待された「息子」の位置は、この男の子に取って代わられたといえる。だが一方で、ジェイコブとサンドラの間には性的関係があったと解釈できるならば、[4]サンドラにとってのジェイコブは、「息子」から「夫」へと、その位置をずらしたと考えられるかもしれない。「ペニス羨望」を持つ女は、「結婚生活といえども、妻が夫をもまた自分の子供となし、夫に対して母親の役を演じることに成功するまでは、安心できないもの」（フロイト，a495）であるからであり、夫の死後、サンドラの「夫」への欲望がジェイコブに向けられたとも考えられるからである。[5]だが、ジェイコブがエディプス・コンプレックスを克服していないと考える限り、ジェイコブは想像界に留まったままであるため、「夫」となることは不可能である。

いずれにしろ、ジェイコブがサンドラの息子でいられなくなったとするならば、ジェイコブの「母」への欲求は誰に向けられることになるのだろうか。ほかの女たちの場合にその可能性を探ってみることにする。

2．母になれない女たち
――フロリンダ、ファニー、クララの場合

サンドラとは対象的な二人の女、フロリンダとファニーは、少なくともジェイコブの「母」にはなれなかった。サンドラに「母」の可能性があったのは、第一にジェイコブから彼女に対して、「母」の現前を求めて、想像界における「呼びかけ」が行われたからであるが、ジェイコブがこの二人の女に語りかけることはほとんどなく、そのためジェイコブからこの女たちに対しての呼びかけはなかったと推測するからである。

人生のスタートにおいて子どもは母に頼りきっているが、授乳や

排泄させるという母の行動の合理的な意味を理解できないため、「母は何を望んでいるのか」という問いに子どもは直面する。この問いが、「母」と子どもの交渉において主要な役割を果たす。「母」の望む対象になろうとすることで、エディプス期直前の、前エディプス期の基本的な構造が成立するからである。しかしフロリンダとファニーの場合、この女たちが欲望しているのは、ジェイコブそのものである。そのため、ジェイコブが二人に呼びかける必要はなく、言い換えれば、彼にはこの「母」たちに「何を望んでいるのか」と問いかける機会は与えられていない。したがってジェイコブは、象徴界に入る準備としての想像界での関係を、この女たちと結ぶことはできない。

仮にこの女たちが、メラニー・クラインが指摘する「ファリック・マザー」であるならば、ジェイコブは彼女たちとの間で前エディプス期を経験する可能性もあるが、それも不可能だろう。クラインによれば、幼児は満足を与える「良い乳房」の取り入れと、欲求不満を引き起こす「悪い乳房」の投影を経験したのちに、「妄想的＝分裂的ポジション」とその次に来る「抑鬱的ポジション」を経過して、対象関係を全体として取り入れるに至り、エディプス・コンプレックスを克服する。このとき、「良い乳房」と「悪い乳房」の分裂は、対象である「母」を絶対的なものと考え、その対象に同一化したいと思うために起こる（Klein）。だが、ジェイコブにしばしば見られる、女たちに対する蔑視的な態度は、彼女たちが彼にとっての絶対的なものではないことを示している。そのため、この二人はそもそもファリック・マザーではありえない。

この女たちが、ジェイコブが同一化を望む「母」になりえないことは、ラカンが論じる鏡像段階の点から考えてみても明らかである。生後６ヶ月以降の幼児は、鏡の前で自分の姿をそれと確認することができる。そして鏡のなかに見る自分の姿を全体的な形として、外にあるものとして把握する。次にそこに見える像に自らを投影し一体化する。しかし、あくまでこの自己同定は自己の外部の虚像に基づくものであるために、自己疎外が起こる。逆に言えば、自己の外部から疎外という形でこの像を受け取らなければならなくなる。こうして他者との想像的な関係が成り立ち、このとき疎外によって生まれた欠如を、欲望で埋めようとする（Lacan, a）。これが一連の鏡像段階の流れであるが、欲望でつながれた他者との関係は、身近で世話をするという意味で、母親との間で最も成り立ちやすいと考えられる。そして、鏡像段階は視覚で始まることから、「母」との想像的同一化は視覚によって可能になるといえる。だがもしフロリンダとファニーが「母」だとしても、ジェイコブは彼女たちから視線を避けており、この「母」たちとの同一化を拒んでいると解釈できる。したがってこの「母」たちとの間に、彼は鏡像段階を経験することができない。

では、視線を向けないジェイコブに注がれるこの女たちの視線を、「母」のものではなく、異性愛によるものと考えた場合はどうだろうか。「相手（女）を視覚的に無視することで、……（男の）優位な立場が伝達される」（166）というナンシー・ヘンリーの説を支持したうえで、リチャード・ダイヤーは、女が一方的に見、男がその視線をはずす場合について、次のように言及している。「（男女が）一対一のとき、女は、男が女を見る以上に、男を見る。……それは、女は男により耳を傾け、男により注意を払うからである。換言すれば、女は男を見る（look at）のではなく、むしろ観察する（watch）のである」（267）。この視線の関係を、ジェイコブに向けられる女たちの視線に当てはめてみるならば、たとえ無視されても、女たちはジェイコブから自分たちに向けられる何らかの反応を期待して、視線を投げかけていると考えられる。それは欲望される喜びを求める受け身的なものであり、それによって男のなかに欲望を呼び覚まし、それを自分に引き寄せることを望むものだといえる。しかしジェイコブの言語欠如が、彼が前エディプスの段階にあることを意味すると考える限り、たとえ女たちがジェイコブを異性として求めても、ジェイコブの欲望はまだ「母」以外の異性へ向けられることはなく、女たちを異性の対象として捉えるには至っていない。したがってこの女たちとジェイコブの間では、異性愛的な恋愛関係は生まれない。フロリンダやファニーはジェイコブの「母」になる可能性を持たなかったが、そればかりか、彼女たちは異性としても、ジェイコブの対象となることはできないのである。

ではもう一人の女、ジェイコブのケンブリッジでの友人ティミー・ダラントの妹クララはどうだろうか。政治の話が盛んに交わされるサロンの女主人である母に、多大な影響を受けているクララにとって、その母は「ファリック・マザー」的存在である。そして母に「献身的な（Devoted）」（145）クララは、母親と同一化した段階にあるといえる。したがって、欲望の対象がまだ「母」から「父」へとは移っていない状態であり、父親と同じ異性を愛情対象とする段階にはほど遠い。またジェシカ・ベンヤミンは、「女の子は母親を力あるものとみなし、父親のペニスへの願望は『母親の力を撃退する』という女の子の欲望を意味している」とし、「反乱と離脱のシンボルとしてのペニスの意味は、母の力という空想から出たのであって、欠如からではない」（94）と述べている。だがクララの父親は全く登場しないことから、クララには「ペニス」を持った「父」が不在であるといえ、したがって、大きな影響力を及ぼす「母」から逃れたいと、たとえ望んでいるとしても、ジェイコブがクララを喩えて言う「岩に鎖でつながれた処女」（106）さながら、逃れる術をクララは持たない。いずれにしろ、母親と癒着状態にあり、「ペニス羨望」を持つには至っていないと考えられるクララには、「女」まして「母」になる可能性はないといえるだろう。スー・ロウは、ジェイコブがエドワード朝の男のように、模範的な「娘」クララの母性と庇護のイメージに魅了されていると指摘するが（xxv－vi）、[6] それがジェイコブにとって、クララが「母」の位置に立つ可能性を含んだものだとしても、クララがジェイコブの「母」になることはないのである。また、クララとの場合にのみ、ジェイコブの結婚の可能性が触れられるが、前エディプス期に留まったままのジェイコブと、異性を愛情対象にするには至っていないクララのどちらから見ても、象徴界の産物である結婚はありえないことになる。

３．母の愛　－　母を求め続けたさきに

ジェイコブにとっての「母」の位置に一番近いのは、実の母のベティ・フランダースのはずである。だがベティとの関係で、ジェイコブがエディプス・コンプレックスへと進めないでいるとするなら、何がそれを妨げているのだろうか。

子どもが「母」の欲望の対象であろうとするとき、「父」が介入して子どもの望みを妨げることが、エディプス・コンプレックス期に起こる。父親の介入は子どもに去勢不安を呼び起こし、子どもから「母」を遠ざけ、「母」の世界から離れる可能性を子どもに与える役目を担っている。だが父が幼いときに死亡しているジェイコブの場合、通常の「父」の介入が行われなかったと推測できる。ベティは、ジェイコブの父シーブルックの生前の業績を称えることで、息子たちに「父」の存在を保証しようと試みてはいるが、「いまではフランダース夫人の一部ではない」（11）と言われることから、シー

ブルックはベティが求めるものではなくなっていることがわかり、したがって母子間に介入してくる「父」ではない。また、シーブルックに代わる「父」の存在も、皆無だと思われる。牧師フロイド、キャプテン・バーフット、ケンブリッジの教授プルーマーなどがその候補に挙げられるだろうが、彼らの同性愛的傾向を考慮したとき、「父」としての役割を担うことは不可能である。[7]こうして「父」が現れることは期待できないため、ジェイコブとベティの間には、母子のみの二項関係が続いていくことになる。

子どもは前エディプス期に、「母」が望むものがなにかを問い続け、与え続ける。そして「<母>の望むことを自らの望むことに引き寄せ、自分が望む<母>を望んでいるように、<母>も望む誰かを望んでいるはず」(原146) だと考えるに至って、ようやくエディプス・コンプレックスの出発点を構成する。そして、「<母>も望む誰か」の先に「ファルス」が、そして「父」が登場する。言い換えれば、母子の二項関係が続く限り、子はひたすら「母」を要求するために問い続け、与え続けることになる。ジェイコブとベティの間でたびたび交わされる手紙や、ことさら強調されるジェイコブからベティに贈られたブローチが、そのあらわれだろう。だが母からの手紙を、ジェイコブは「ランプの下のビスケット缶とタバコ箱の間に置き放しに」(78) し、ジェイコブの手紙には、ベティの「知りたいことは、ほんとうに何も書いてくれていない」(122)。二人のこのすれ違いは、想像界における「呼びかけ」が機能していないことを示すものである。そもそも「呼びかけ」によって子どもが望むのは、「母」が現れることである。言い換えれば、要求するモノそのものではなく、要求することによって、そのモノを携えた「母」が自分のところにやってきてくれることを望んでいる。それは、「母」が自分を愛してくれていることを確認する作業といえ、「自分は愛すべきものであるということを<他者>に納得してもらおう」(ラカン361) とするものである。しかし、ベティがなくしてしまうブローチには、子どもが「母」の愛を求めていることに、ベティが気づいていないことが暗示されている。

レイチェル・ボウルビーは、突然現れたジェイコブと列車のコンパートメントに二人きりになったノーマン夫人が、ジェイコブに対する印象を恐怖から親しみへと変化させていったことに注目して、次のように述べている。

> 列車内のジェイコブを男(で危険なもの)として見ることから、息子(で安全なもの)のように彼を見るという変化は、その女の目に映った彼を、典型的な人間から一個人に、見知らぬ者からよく知った近しい友人へと変えた動きとして、読むことができる。……彼はまず野蛮人(savage)としてみなされ、それからすべての母の息子という親しみのあるものに教化されたのである……列車のコンパートメントは家庭なのだ。(90−91)

未開な(savage)状態の子どもが、「母」を目の前にして「息子」となりえた列車内でのこの擬似母子関係は、「父」の介入しない二人だけの関係のなかで、子どもが望むものが「母」の現前であり、したがって自分を欲する「母」の愛であることを示唆した出来事だといえる。列車を降りたジェイコブは唐突な侵入のときと同様に、突如ノーマン夫人の目の前から消えてしまう。この「母子関係」の消滅とジェイコブの失踪の関係は、ジェイコブと母ベティの関係に重なり、小説の冒頭シーンを思い起こさせる。

冒頭では、幼いジェイコブがコーンウォールの海岸で迷子になっており、ジェイコブを探す兄アーチャーの「ジェイコブ!ジェイコブ!」という声が繰り返され、結局、母ベティによってジェイコブは見つけられるが、このことは、ジェイコブ自身が「母」の前から消えてみせることで、「母」が自分を欲する状態を作ったと考えられるだろう。そしてこの冒頭と対応するように、小説の最後はつぎのようなシーンで終わる。

> 「ジェイコブ!ジェイコブ!」ボナミーは窓際に立ったまま叫んだ。木の葉は再びしずまりかえった。
> 「あっちもこっちもなんてめちゃめちゃな!」とベティ・フランダースは寝室のドアをぱっと開けると叫んだ。
> ボナミーが窓辺から戻ってきた。
> 「これはどうしたらいいのかしら? ボナミーさん。」
> 彼女はジェイコブの古靴をさしだした。(155)

これは、ジェイコブの友人のボナミーとともに、母ベティがジェイコブがいなくなった部屋を訪れたところである。[8] ここでもまた、いなくなったジェイコブは「ジェイコブ!ジェイコブ!」と呼びかけられる。しかし海岸シーンとは違い、ここではジェイコブは現れないまま終わる。「母」の現前を要求するために「母」が望むものを与え、その代償として「母」の愛を求めようとする子どもは、際限のないその繰り返しで、とうとう与えるものがなくなり、「母」の愛を得ることも断念して、ついに自ら消えてしまったのだろうか。

本論の冒頭で触れたように、ジェイコブが戦死したという明確な記述はない。状況からして戦死だと考えられ、またそれを前提にこの作品は解釈されてきている。しかし死んだことが明確にされていない以上、ジェイコブが生きていると考える可能性も残されているはずである。冒頭の海岸のシーンにあったように、ジェイコブは「母」の愛を求めて、どこかで母が見つけてくれることを待っているのかもしれない。想像的な状態にあるからこそ、ひたすら「母」の愛を求めるジェイコブは、サンドラやほかの女たちの愛を得ても彼女たちとの関係を築くことはできなかったが、その関係はすべて、母ベティの愛を求めるゆえのものだったといえるだろう。

4. ジェイコブの死
——「男」になれない男の場合

ジェイコブは第一次世界大戦で死んだと解釈されている。しかし必ずしもそう結論づけられないことは、これまでにみてきた通りである。結末にはいくつかの可能性が考えられる。

仮に定説通り、ジェイコブが第一次世界大戦で戦死したとしよう。それは、最も象徴的な領域であることが求められる戦争という場に、想像界に留まったままの「子ども」であるジェイコブが不適応を起こし、そのための死であったと解釈することができる。つまりこの場合のジェイコブの死は、「母」から離れることができず、そのため永久に「ファルス」を手に入れることが不可能な男には、社会的に生き残ることができないことを意味する。この小説は戦争色が濃く、ジェイコブの名字フランダースには、第一次世界大戦時、1日で2万人のイギリス兵が戦死したフランドル地方での戦闘が重なる。またベティが住むスカーバラは、この戦争初の国内砲撃をドイツ軍によって受け、多数の市民が死亡した場所でもある。「フランダース」や「スカーバラ」という地名が、こうした戦争による死のイメージを強く帯びているため、フランダースの名を持つジェイコブには、その死の必然性が強調されていると考えられ、またスカー

バラの住人である母にも戦争での死亡が暗示されているとするならば、この二人の死は、象徴界へと子どもを導くことのできない母子関係の否定を示したものといえる。あるいは、戦争に行ったとしても必ずしもジェイコブが戦死したことにはならない。そこが象徴的領域だからこそ「父」の出現が期待でき、ジェイコブはエディプス・コンプレックスを克服する機会を得て、象徴界に相応しい男となって帰還すると予想することは可能だろう。いずれにしても、象徴的なシステムに組み込まれるか否かが、特に戦争に直面したときに、社会的な生を左右することは確かである。

このことは、第一次世界大戦に突入し、戦争熱が高まっていたイギリス社会で、顕著に見られる。例えば、大戦開始時のイギリスでは徴兵制がなかったため志願兵が募られたが、そのために作られたポスターには、「BRITONS "WANTS YOU" / JOIN YOUR COUNTRY'S ARMY! / GOD SAVE THE KING（イギリスは君を求める。祖国の軍隊に入れ！神よ国王を救いたまえ。）」や、「WOMEN OF BRITAIN SAY－"GO!"（イギリスの女たちは「行け！」と言う。）」というスローガンが掲げられていた。その結果、50万の予想をはるかに上回る300万人以上の志願兵が集まった。また、煽動的な政治家の演説や報道操作が、イギリス国民の愛国心を駆り立てていた（Taylor 39－42）。しかし、一方では、多くの兵士に「シェル・ショック」というヒステリー症状が見られ、それは、「ゆらぐことのない男らしさ」という大戦のイメージを危ういものにもしていたのである。シェル・ショックは、「戦争における男らしい役割に対する社会の期待」に耐えられずに、そのストレスを身体で表明したものだからである（Showalter 169－71）。またこのストレスは、同性愛という形でも表れた。例えば、前述の志願兵募集のポスターを作製し、率先して志願兵を募ったキッチナー将軍は、未婚の若い士官を自宅に招いて、「少年たちの幸福な私の家族」と呼んでいたという（Hyam 38）。このことを、男同士の社会的関係の強化と解釈する限りでは、ファルス中心主義は堅固である。しかし、軍隊という男たちの緊密な集団内での同性愛的な欲望をそこに見るならば、それはシェル・ショック同様、象徴的なシステムを揺るがすものである。「男らしさ」を表明する戦争の先頭に立つ男がそのような行動に出たことは皮肉であり、かつ象徴界の脆弱さを露呈してもいる。

象徴界の揺らぎを示すエピソードは、この小説の中でも描かれている。それは、フロリンダの婚姻外での妊娠である。父親のいないフロリンダが、やはり父親のいない子どもを産むことで次世代へ繋げていこうとしていることは、戦争に参加して象徴的人間になることを余儀なくされているジェイコブの対極にある。これは、ジェイコブは戦争に参加せず、「母」の愛を求め続けた末にどこかへ去っていったという解釈とともに、想像的な領域での生き残りの可能性を示すものであり、象徴的なものの絶対性に疑問を投げかけているといえる。

この小説は、冒頭と最後の場面が呼応しており、冒頭ですでにジェイコブの死という結末が含意されていると、ヴィンセント・シェリーは指摘している（270）。しかし結末がすでに冒頭で暗示されているとしたら、それは母ベティから去っていくジェイコブの姿だろう。象徴界へ入るために母のもとを離れたのか、それとも想像界に留まり、母の愛を求め続けるためだったのか。その答えは、戦争を前にしていくつもの可能性を含んでいる。そのため、この小説の最大の疑問である「ジェイコブの死」の真偽は曖昧なまま残されているが、それだからこそ、この小説は、象徴界の揺らぎをテクスト化したものと言える。

註

1　Bazin や Zwerdling が言及している。トビーの死との関連については、Bazin のほか、Ruddick などが指摘している。

2　ジェイコブを探し求めるほかの女たちには、なかなか彼の姿を捉えることができないにもかかわらず、サンドラだけはオリンピアでもアテネでも、いち早く彼の姿を確認する。また、ジェイコブはエレクテイオンの女神像にサンドラを重ね合わせ、繰り返しその像を見つめる。ほかの女には向けられないジェイコブの視線が、サンドラにだけは注がれることを示している。

3　ファルスと、器官としてのペニスを、ラカンは別のものとして考えているが、去勢され欠如しているものがラカンのいうシニフィアンとしてのファルスとするならば（Lacan, b）、「ファルス」は部分的にであれ、女の去勢不安を満たす「ペニス」としての息子でありうるだろう。

4　深夜アクロポリスへ出かけたジェイコブとサンドラの姿が暗闇の中に消え、その行方が最後まで語られずに終わることから、二人の性的な関係が仄めかされていると考えられる。

5　サンドラが寡婦用の家からジェイコブに手紙を書いていることから、夫エヴァンが死亡したと考えられる。またこのとき、サンドラは息子を見ながら、「彼は、まるで子ども（boy）ね」（149）（原文強調）と独り言を言うが、わざわざ強調されるために、「彼」が息子ではなくジェイコブを指したものであり、欲望の対象がジェイコブであることを窺わせる。

6　ジェイコブと二人で葡萄を狩ったクララは、バスケットの中で温まって丸まっている葡萄の上に大きな葡萄の葉を二枚被せるが、ロウはその行為に、クララの母性と庇護のイメージを見ている。

7　フロイドが少年のジェイコブに与えたバイロンの全集には、同性愛を暗示させるものがあり（バイロンは男の恋人がいたことを告白している。Vanita 173）、バーフットの場合には、「男の子たちの中で彼（ジェイコブ）がいちばん好きだった。しかし、その理由を言うことについては……」（60）と思わせぶりな語り手による説明が、同性愛を匂わせ、プルーマーにも、ダラントとの間で交わされる視線から、同様の可能性が窺われる。

8　フロイトは、母への固着が、「他の女性対象へ移りゆくのを妨げる」一つの要因となって同性愛に至ると指摘している（フロイト b260）。ジェイコブの同性愛相手であるボナミーと母ベティが揃って現れることで、母に対するジェイコブの強い要求が、小説の最後に強調されている。

参考文献

Bazin, Nancy Topping, Jane Hamovit Lauter. "Virginia Woolf's Keen Sensitivity to War: Its Roots and Its Impact on Her Novels." *Virginia Woolf and War: Fiction, Reality, and Myth*. Ed. Mark Hussey. New York: Syracuse UP, 1991. 14－39.

Benjamin, Jessica. *The Bonds of Love: Psychoanalysis, Feminism, and the Problem of Domination*. New York: Pantheon Books, 1988.

Bowlby, Rachel. *Feminist Destinations and Further essays on Virginia Woolf*. Edinburgh UP, 1997.

Dyer, Richard. "Don't Look Now: The Male-Up." *The Sexual Subject: A Screen Reader in Sexuality*. London & New York: Routledge, 1992. 265－76.

フロイト、ジクムント a「女性的ということ」（1933）『フロイト著作集１精神分析入門（正・続）』懸田克躬他訳、人文書院、2000年、477－96頁。

――b.「嫉妬、パラノイア、同性愛に関する二、三の神経症的機制について」（1922）『フロイト著作集６自我論・不安本能論』井村恒郎訳、人文書院、2003年、254－67頁。

Henley, Nancy. *Body Politics*. New Jersey: Prentice-Hall, 1977.

Hyam, Ronald. *Empire and Sexuality: The British Experience*. Manchester & New York: Manchester UP, 1990.（『セクシュアリティの帝国－近代イギリスの性と社会』本田毅彦訳、柏書房、1998年）

Klein, Melanie. "Notes on Some Scizoid Mechanisms."（1946）*The Selected Melanie Klein*. Ed. Juliet Mitchell, New York, The Free Press, 1987. 175－200.（「分裂的機能についての覚書」『メラニー・クライン著作集４妄想的・分裂的世界』小此木啓吾他訳、誠信書房、1985年）

Lacan, Jacques, a. "The Mirror Stage as Formative of the *I* Function: as Revealed in Psychoanalytic Experience." *Écrits: A Selection*. 1966. Trans. Bruce Fink. New York & London: W.W.Norton & Company, 2002. 3－9.（「＜わたし＞の機能を形成するものとしての鏡像段階－精神分析の経験がわれわれに示すもの」『エクリⅠ』宮本忠雄訳、弘文堂、1972年）

――b. "The signification of the Phallus." *Écrits: A Selection*. 271－80.（「ファルスの意味作用」『エクリⅢ』佐々木孝次訳、弘文堂、1981年）

ラカン、ジャック『精神分析の四基本概念』（1964）ジャック＝アラン・ミレール編、小出浩之他訳、岩波書店、2000年。

原和之『ラカン哲学空間のエクソダス』講談社、2002年。

Neale, Steve. "Masculinity as Spectacle." *The Sexual Subject: A Screen Reader in Sexuality*. London & New York: Routledge, 1992. 277－87.

Ruddick, Sara. "Private Brother, Public World." New Feminist Essays on Vir-

ginia Woolf. Ed. Jane Marcus. London & Basingstoke : Macmillan, 1981. 185－215.

Sherry, Vincent. *The Great War and the Language of Modernism*. Oxford UP, 2003.

Showalter, Elaine. *The Female Malady : Women, Madness, and English Culture, 1830－1980*. 1985. New York : Penguin Books, 1987.（『心を病む女たち－狂気と英国文化』山田晴子他訳、朝日出版社、1990年）

竹村和子『愛について－アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店、2002年。

Taylor, A.J.P. *The First World War : An Illustrated History*. Harmondsworth : Penguin, 1966.（『第一次世界大戦』倉田稔訳、新評論、1980年）

Vanita, Ruth. "Bringing Buried Things to Light : Homoerotic Alliances in *To the Lighthouse*." *Virginia Woolf : Lesbian Readings*. Ed. Eileen Barrett and Patricia Cramer. New York & London : New York UP, 1997. 165－79.

Woolf, Virginia. *Jacob's Room*. 1922. Ed.Sue Roe. London : Penguin Books, 1992.（『ジェイコブの部屋』出淵敬子訳、みすず書房、1977年）

Zwerdling, Alex. *Virginia Woolf and the Real World*. Berkeley : U. of California P, 1986.